

日がさとちよう

小川未明

青空文庫

ある山やまの中なかの村むらに、不ふしあわせな二人ふたりの娘むすめがありました。

ひとりひとりの娘むすめは、生まれつき耳みみが遠とおうございました。もう一人ひとりの娘むすめは、小ちいさな時じぶん分にけがをして、びっこであつたのであります。

この二人ふたりの娘むすめは、まことに仲なかのいいお友ともだちでありました。そして二人ふたりとも性せい質しつのいい娘むすめでありました。

二人ふたりの女おんなの子こは、どちらも十四、五歳さいになつたのであります。そして、それぞれなにかふさわしい仕事しごとにつかなければなりませんでした。

ある日ひのこと、耳みみの遠とおい娘むすめは、びつこの娘むすめのところへやってまいりました。びつこの娘むすめは、いつにないお友ともだちの沈しずんでる顔かおつきを見て、

「なにか心しん配ぱいなことでもあるのですか？」と、やさしくたずねました。

「私わたしは、遠とおいところへゆかなくてはならないかもしれませぬ……。」と、耳みみの遠とおい娘むすめは答こたえしました。

びつこの娘むすめはそれを聞きいて、びつくりいたしました。二人ふたりが、別わかれるということは、どんなに、悲かなしいことであるかしれなかつたからであります。

「遠いところというのは、どこですか。」と問いました。

「東京へ奉公にゆくようになったのです。私は、うれしいやら、悲しいやら、わからないような気持ちでいます。」と、耳の遠い娘は答えました。

「まあ、東京へ？ それは、どんなにしあわせだかわからない。私も、一度東京へ行ってみたいと思つていますが、こんな体では、とても望みのないことであります。あなたは、東京へ行って、にぎやかなところをごらん下さい。しかし、後に残された私は、さびしいことでしよう。」と、びつこの娘は、涙をのんでいきました。

二人は別れを惜しみました。村の若い娘たちの中では、こんど東京へゆくようになった耳の遠い娘をうらやましく思つたものもありました。

ある日のこと、耳の遠い娘は、みんなに村のはずれまで見送られて、いよいよ都に向かつて出発したのであります。

彼女は、道すがら、汽車の中も、だんだん遠く隔たつてゆく故郷のことを思いました。また、仲のよかつたびつこの娘のことなどをも思い出して、いつまた二人はあわれむだろうか、悲しく思わずにはいられませんでした。

彼女は、東京にきて、一年働き、二年働き、三年と働きました。そして、すつか

り都会の生活になれてしまったのです。その間に、びつこの娘からは、たよりがおりおりありましたが、それもいつしか絶えてしまいました。

しかし、彼女は、なにかにつけて、故郷のことを思い出さずにはいられなかったのです。あのころのお友だちは、どうしたろう？　と慰みますと、どうか、一度、ふるさとへ帰ってきたいものだと思いました。

彼女は、耳が遠いものですから、同じ奉公をしましても、ほかの女たちのように、どんな仕事にでも、役にたつというわけにはゆきませんでした。それですから、したがって、もうお金は少なかったのです。

しかし彼女は、それをべつに不平にも思いませんでした。そしてこんど、ふるさとへ帰る時分に、着てゆく着物やおみやげに費おうと、すこしずつなりとためておきました。

五年めの春の終わりのころ、彼女は、ふるさとへ、幾日かの暇をもらって、帰ってくることにいたしました。

彼女は、新しい着物を造りました。新しいげたも買いました。そしてもつとそのうえ、東京から帰ったということを、田舎の人たちに見せたいために、どんなものを買っていったらいいだろうかと考えました。

「みやこ都は、なつちょうど夏のはじめのきせつ季節でありましたから、まち街のとうぶつみせ唐物店には、りゆうこう流行のうつく美しいひ日がさが、しゅるいいく種類となくなら並べてありました。」

「あの日あの日がさをさしてかえ帰ったら、みんなどんなにみんながたまげよう……。」「と、かのじよ彼女は、おも思いますと、それをさしてかえ帰って、みんなみんなに見せてやりたいものだというき気になりました。かのじよ彼女は、とうぶつみせ唐物店へいっていって、なかその中のハイカラなのを、たかかなり高いかねお金を出してか買いました。それをさしてある歩いた姿は、すがたまったくとうきよう東京のおんな女であって、どこにもどこにも、やまおく山奥のいなかむすめ田舎娘らしいところは見えなかつたのであります。」

かのじよ彼女は、じぶん自分の姿をすがた鏡にうつして見とれていいました。そして、いよいよいよいよふるさとに向むかつてたびだ旅立たつたのであります。

やまなか山の中のむらさびしい村では、みみ耳のとおむすめ遠い娘が、み見ちがえるほどに、うつく美しくなつてかえ帰つたといつて、あちらでもあちらでもこちらでもこちらでも、うわさうわさをしました。

「たいへんたいへんな、ハイカラハイカラさんになつてきた。」と、みんなみんなは、くちぐち口々にいいはいいはやしたのであります。娘娘たちは、まだまだ、こんなりこんなりつばなつばな日日がさを見たことがありませんから、耳耳のとおむすめ遠い娘が、日日がさをさしてある歩くと、みんなみんなはそのそばそばによ寄つてきました。はじめのうちはうちは、めまる目を丸く丸くしてみ見ているばかりで、えんりよ遠慮をして、か貸してくれなどいいたものもありません。

んが、日数がたつて、昔のいっしよに遊んだ、耳の遠い娘であつたということが、頭の中にはつきりとわかると、

「私に、ちよつと貸してくんなさい。」といつて、娘たちは、美しい、うす紅色と水色の模様のついた日がさを借りて、喜んで、それをさしてみました。

「東京では、こんなりつぱなものを毎日さし、道を歩くだけ……。」といつて、聞いたものもあります。

「これから、街の中は、こんなパラソルがいくつ通るか、数えきれないくらいだ。」と、耳の遠い娘はいいました。

これをきくと、田舎の娘たちは、都のありさまをいろいろに想像しました。

「それだら、たくさん、きれいなちよつとが、飛んでいるように見えるだろう。」といったものもありました。

「ほんとうに、ちよつとが飛んでいるように美しいだろう。」といったものもありました。

「どら、おらにも、ちよつと貸してくんなさい。おら、生まれて、はじめて、こんなりつぱなものをさしてみるだ。」といった娘もありました。

その娘は、日がさを借りてさしてみました。そして、仰ぎますと、うすい絹地をおし

て太陽の光が、まばゆく、顔の上に映るような気がしました。

「まあ、お日さまが、すいて見えるだ。なんという、うすいりっぱな、羽のようなこうもりだろう。」と、ため息をもらしました。

「どら、私にも貸してくんなせい。」といって、村の娘たちは日がさを、たがいに奪い合いました。

そのうちに、一人の娘は、すこしでも長く自分がさしていたと思つて、日がさをさしながら、あちらへ逃げてゆきました。

「なんだずるい。自分ばかりさして、おれにも貸してくんなせい。」といつて、他の一人の娘は、その後を追いかけてきました。

逃げた娘は、山道を日がさをさして駆けてゆきました。そのあとを他の娘たちは、追つていったのです。

きれいな日がさは、木の枝や、奪い合いのために切り株などにあたつて、破れました。村の娘たちは、はじめてたいへんなことをしてしまつたと驚いて、耳の遠い娘のところへきて、あやまりました。

彼女は、せつかく買ってきた大事な日がさの破れてしまつたのを見て、ただぼんやり

としてしまいました。美しい日がさが破れると、もう村の娘たちは、用事がないといわぬばかりに、どこかへ散つてしまいました。

「見たとこばかりきれいでも、あんな紙ようなものが、なんの役にたとうかさ。」と、村の娘はあざ笑つたものもあります。

耳の遠い娘は、急にさびしくなりました。しかし、びつこの娘は、昔もいまも、やさしい心をもつていて、すこしも変わりはありませんでした。

びつこの娘は、家において、百姓をしていましたが、暇をみては、耳の遠い娘のところへたずねてまいりました。そして、彼女から都会の話をきくのを楽しみにしたのであります。

「ああ、私は、いつ東京へいつて、そのにぎやかな光景を見られるだろう？」と、びつこの娘は、ひとりため息をもらしたのでした。

そのうちに、日数がたつて、耳の遠い娘は、また東京へ帰らなければならなかったのです。

「私は、また明日、東京へ立つことになりました。」と、びつこの娘のところへきて、暇ごいを告げたのであります。

「こんどは、いつ、二人が、あわれようか……。」と、びつこの娘は、別れを悲しみました。ついに別れる日となりました。びつこの娘は耳の遠い娘を村のはずれまで送ってゆきました。

「どうぞ、お達者で暮らしてください。この日がさは、あなたに置いてゆきます。」と
いつて、耳の遠い娘は、日がさをかたみに、びつこの娘に与えました。

二人は、そこで悲しい別れをしました。びつこの娘は、ひとり山道を歩いて帰ります
途中、道ばたの石の上に腰をかけて休みました。そして、ふたたび都へ旅立っていった
友だちのことを思い出しながら、美しい日がさを開いてながめていました。

たちまち、青葉の上を波立っていました山風が襲ってきて、この日がさをさらってゆ
きました。びつこの娘はいつしうけんめいであとを追いかけてきましたが、とうとう日がさ
は、深い谷の中へ落ちて見えなくなりました。

しかし不思議なことに、そのあくる年からこの山には、美しい更紗模様のついたちよう
が、たくさん谷から出てきました。

村の娘たちは、みんなそのちようを見て、いつか、耳の遠い娘がさして帰った、日がさ
を思い出さないものはなかったのです。

また、それから幾年いくねんにもなりますが、二度と耳みみの遠い娘とのおむすめは、ふるさとへ帰かえつてこないのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷発行

初出：「週刊朝日」

1924（大正13）年7月

※表題は底本では、「日《ひ》がさとちよう」となっています。

※初出時の表題は「日傘と蝶」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：雪森

2013年5月4日作成

2013年8月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日がさとちょう

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>